



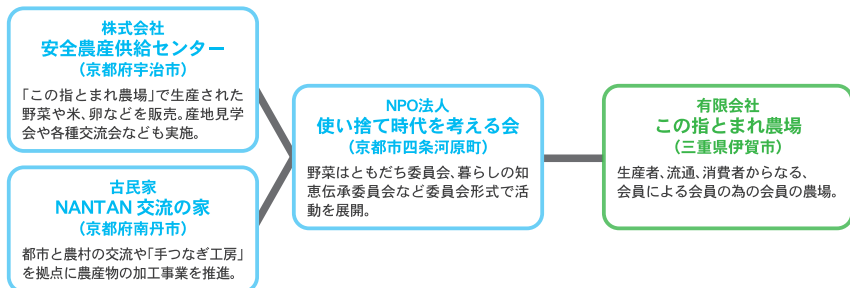
〈目標2〉 飢餓をゼロに

飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する

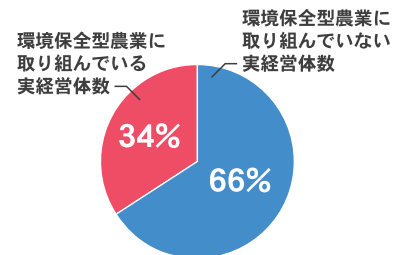
足元の暮らしを見つめなおすことから、安心安全で持続可能な食を実現する

NPO法人使い捨て時代を考える会は、京都に拠点を置いた市民運動と京阪神を中心とした産直提携運動という大きく2つの取組を行っており、後者は株式会社安全農産供給センターという形態で運営されている。これらNPOと株式会社を両輪に、実態としては生活協同組合のような事業を展開している。1973年にNPOが先に設立され、古紙回収から始まり、有機農業運動、食育、地域通貨、古民家交流など多岐にわたる活動を委員会形式で行っている。やりたいという意思が尊重されるため、これらの委員会は担う人がなくなった時点で解散になる。組織として不可欠なNPO法人の理事会と株式会社の取締役会も選挙で構成員を選ぶというほど、徹底的にボトムアップ型の運営にこだわっている。根底にあるものは、この活動を考える素材にしたいという思いだ。自らの生活を変えずに食の安全を求めるエゴイズムが消費者の中にもあることを自覚し、活動を通して考えること

NPO法人使い捨て時代を考える会の構成

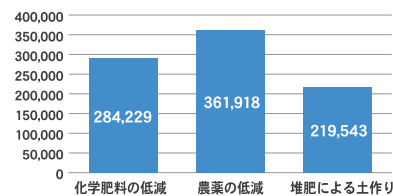


環境保全型農業に取り組んでいる経営体の割合



出典：2015年農林業センサス

環境保全型農業に取り組んでいる経営体の取組形態別経営体数



出典：2015年農林業センサス

を大事にしているため、団体が行っている活動の中で強制されることがない。

産直提携運動も商品をただやり取りするだけではなく、契約する農場や酒蔵、商店などへの産地見学会や、農業教室や援農、味噌作りなど、体験が大切にされている。それは現代的な消費者の多くにとっては億劫なものかもしれない。しかしながら安くて便利なものがほしいという消費者側の欲求を満たすため、工場のような農産物の生産が推進された結果として、食の安全が揺らいだり、生物多様性が損なわれたりなど様々な問題が生じてきた。その流れを断ち切るために、足元の暮らしを見直し、自分の頭で考えることが重要だ。環境に負担が少ない有機農産物の地産地消を実践し、そこから収穫される恵みに感謝し生かす生活の復権こそが、食にまつわるあらゆる諸問題を解決する鍵となる。



生産物を扱うショップを事務所に併設



事務所の屋上でも菜園を実践



● 財政的な組織の持続可能性は大事だが、会員の拡大ありきではなく、取組に参加する方々との「縁」を大切にしたい。

京都府

平安京遷都から明治時代初期に首都が東京へと移るまでの約1,000年間、日本の首都として政治・経済・文化の中心であった。世界遺産にも指定されている寺社仏閣が集中している京都市域(内陸側)が連想されがちだが、丹後・中丹地域(日本海側)はリアス式海岸に良港が存在する、という南北に多様な顔を持つ。

Data 2016年10月1日現在

- 人口: 2,605,731人
- 面積: 4,612.19km²
- 耕地面積: 310.00km²

[NPO法人使い捨て時代を考える会] <http://www.tukaisutejidai.com/>

[安全農産供給センター] <http://www.anzennousan.com/>